

接尾辞タラシイの成立

島田泰子

キーワード…タラシイ型形容詞、接尾辞ラシイ、接尾辞の肥大、

強調語形、マイナスの意味

要旨

本稿は、ムゴ(ツ)タラシイ・イヤミ(ツ)タラシイなどの形容詞を構成する接尾辞タラシイについて、その用法の実態を記述し、さらに、その成立の時期と経緯とを考察するものである。

タラシイ型の語例について、その構造や上接語の意味、対応するラシイ型の有無などの観点から検討を行い、これに用例の出現年代を照らし合わせての考察を加えると、接尾辞タラシイの成立は、次のように三段階に記述されることになる。

- ・ナガタラシイにおけるタラシイという語形の個別的発生
- ・ラシイ型の強調形としての語形の応用による一般化
- ・接尾辞タラシイとしての定着

一、はじめに

本稿で扱うタラシイ型の形容詞は、やや卑俗な語でありさほど注目されることもなく、接尾辞としての成立が論じられる以前に、用

法の実態についての調査や記述も、なされた様子はない。これに言及するものとしては、わずかに、ナガタラシイの語をアマタラシイの語とともに捉えようとした『菊池俗言考』(永田穂積・嘉永七年一八五四)、アマタラシイの項や、接尾辞タラシイを「態(てい)らしい」の変化したものかとする『日本国語大辞典』(小学館、タラシイの項)などの記述が見られるが、いずれも、断片的でないし不十分で、接尾辞タラシイの成立としては従いがたいものである。^{注1)}

そこで、本稿ではまず、実際にどのような語があつて、それらがどのような構造をとるものであるのか、また、それぞれどのような時期に、どのような意味で用いられているのか、などといった用法の実態を明らかにした上で、接尾辞タラシイの成立を考察していくことにする。

二、用法の実態と考察

まず、実際に用いられるタラシイ型にどのような語があるのか、その語例をまとめてあげ、便宜上番号を付して一覧にしておく(本稿では語形としての例を「語形」、文献での使用例を「用例」と区別する)。

和七年(一八九三)

(例4) 『何時も我侘なことをながつたらしく書きます。御許しくださ
い。』書きあげて時計を見たら二時少し前だった。(お目出たき人〔武者
小路実篤〕四 明治四十四年(一九一三))

こういった意味的傾向を、本稿では「マイナスの意味への傾き」
等と表現することにするが、このような意味傾向は、タラシイ型を
派生するもつとも基本となる語にも見られる。先に語例一覧におい
て下段に示した語は、A類B類ともに、ほとんどの場合、そもそも
マイナスの意味を持つ語であった。

もつとも、①ナガイ、⑦オンナ、⑬ノンキ、^{注3}のように、語として
の意味が本来プラスやマイナスへの傾きを持たないものもある。先
に語例一覧で#の記号を付したものは、これを表したものであるが、
①ナガ(ツ)タラシイが歓迎されない長さや、嫌になるほどナガイよ
うすを形容する語で、⑦オンナツタラシイが女らしくてはいけない
時にオンナらしい場合(特に男性が女々しい時など)になるように用
いられる表現であるなど、これらは、語の本来の意味としては傾き
をもたないものの、文脈的にマイナスへ傾く時に、タラシイ型を派
生するものと考えることができる。

さて、語例一覧の中段にあげたように、タラシイ型のほとんどの
場合には、これに対応するラシイ型が見られる。⑤イヤミラシイ、
⑰ミレンラシイなど、現代ではむしろタラシイ型の方が優勢と見ら
れるものでも、近世から近代にかけては、その用例からラシイ型の
方が一般であったものと見受けられる。

また、近世には、タラシイ型と対応するもの以外にも、非常に多
くのラシイ型の形容詞が用いられており、これらの語例や用例の多

^{注4}さから、近世期における接尾辞ラシイの勢力は相当なものであつた
と考えられる。

対応するラシイ型を持たないものも、①ナガ(ツ)タラシイ、⑧キ
ザツタラシイ、⑩ミジメ(ツ)タラシイの三語あるが、この三語を除く
すべてのものには、文献にラシイ型が確認される。⑭、⑮のように
孤例であったり、⑩のように一語化しているかどうか疑わしいもの
など、辞書などにも登録されていないものも、意味などからここに
いうラシイ型と認められる。

(例5) 宿がへにびんぼうらしい大女房(雑俳・折句いろは引 文化初年
一八〇四)

(例6) 丸木橋／＼網の有の不自由らし(雑俳・冠付四季の花 嘉永四年
一八五二)

(例7) ムウ扱はあの女は此家の主とこそみゆれ、所めなれぬ風俗見れば
髪を切たる若後気、すけべいらしいめもと、や、幸の事こそあれと、(信
田小太郎 元禄十五年頃(一七〇一—二))^{注5}

(例8) あんまりべた／＼と化粧したのも、助兵衛らしくしつこくて見
ツともないよ。諸事婀娜とか云て薄化粧がさつぱりして能はな(浮世風
呂一三・下 文政九年(一八二二))

なお、接尾辞ラシイのラは、いわゆる情態言を構成する接辞ラで
あると考えられ(村上(一九八一)、また、重複することとラを接尾
することの意味的な連続性は語構成研究の分野ではすでに論じられ
てあり(飯倉(一九六六)・蜂矢(一九七八))、ラシイ型の語の表現性は、
重複形容詞の持つ表現性にほぼ等価なものである、と考えておいて
よいかと思われるが、ラシイ型とタラシイ型との違いは、用例から
次のように確認できる。

先程述べた⑦⑬のように、タラシイ型の語形を取ることでは明らか

にマイナスの意味へ転じるもの、⑤⑩など、ラシイ型とタラシイ型とで、語としての意味・用法に多少の違いが認められるもの^{注5}など、全般に、タラシイ型の方にラシイ型よりもやや強い語気・語感が認められる。

結論的には、これら対応する両者においては、タラシイ型の形式をとる場合の方が、ラシイ型の形式よりも強烈な意味を表し得るものと考えられる。

次に、以上のことに、用例の出現年代の事実を加えて考察を進めていく。逐一の用例はここに挙げ得ないが、成立を論じるに当たって重要となる用例の年代、出現の時期などについては、次頁「年表」を御参照いただきたい。

この「年表」は、文献に見られた、対応するタラシイ型及びラシイ型の用例を記号化し、年表上にプロットしたものである(表が煩雑になるのを防ぐため、ラシイ型の場合は、語によっては幾分か省略がある)。

年表中の記号は、凡例の通り。また、③のニクタラシイに関して、成立の事情がほかのタラシイ型とやや異なるため、関連するものとしてニクテ(イ)ラシイの例を◎で表示してある。

まず、「年表」を一瞥して見て取れるように、ほとんどのタラシイ型は、近代に入ってから成立したものである。特にB類のものは、ほぼ近世の終わり頃まで用例が見られない。その一方で、A類のものは近世からすでに多用されており、タラシイ型の早い例は、近世前期、一六〇〇年代半ばには早くも現れている。つまり、一口に「成立」といっても、語によってその時期にはかなりの開きがあるのである。

B類がA類に遅れて現れることの意味を、その構造の違いから考えておく。B類は独立的な語を上接部にとるもので、一語化したA類のものに比べ、上接部とタラシイの間の結合が、よりゆるやかなものであるといえる。またB類において接尾辞タラシイは、和語・漢語を選ばずさまざまな語に接尾しており、先に述べたような、マイナスの意味を持つ語にほぼ限られるといった意味上の制約はあるものの、かなり自由にB類のものを造語している。こういった造語の自在性は、接尾辞タラシイが近代に生産性を獲得していたことの現れである、と考えられよう。

以上のことから、接尾辞タラシイの成立を考えるに当たっては、^{注6} 时期的にも、造語のあり方から見ても、「発生」と「定着」の少なくとも二段階にわけて論じるべきであろうと思われる。

次に、タラシイ型に対応するラシイ型の例は、ほとんどの場合、タラシイ型にほぼ先駆けて見られる(「年表」参照)。

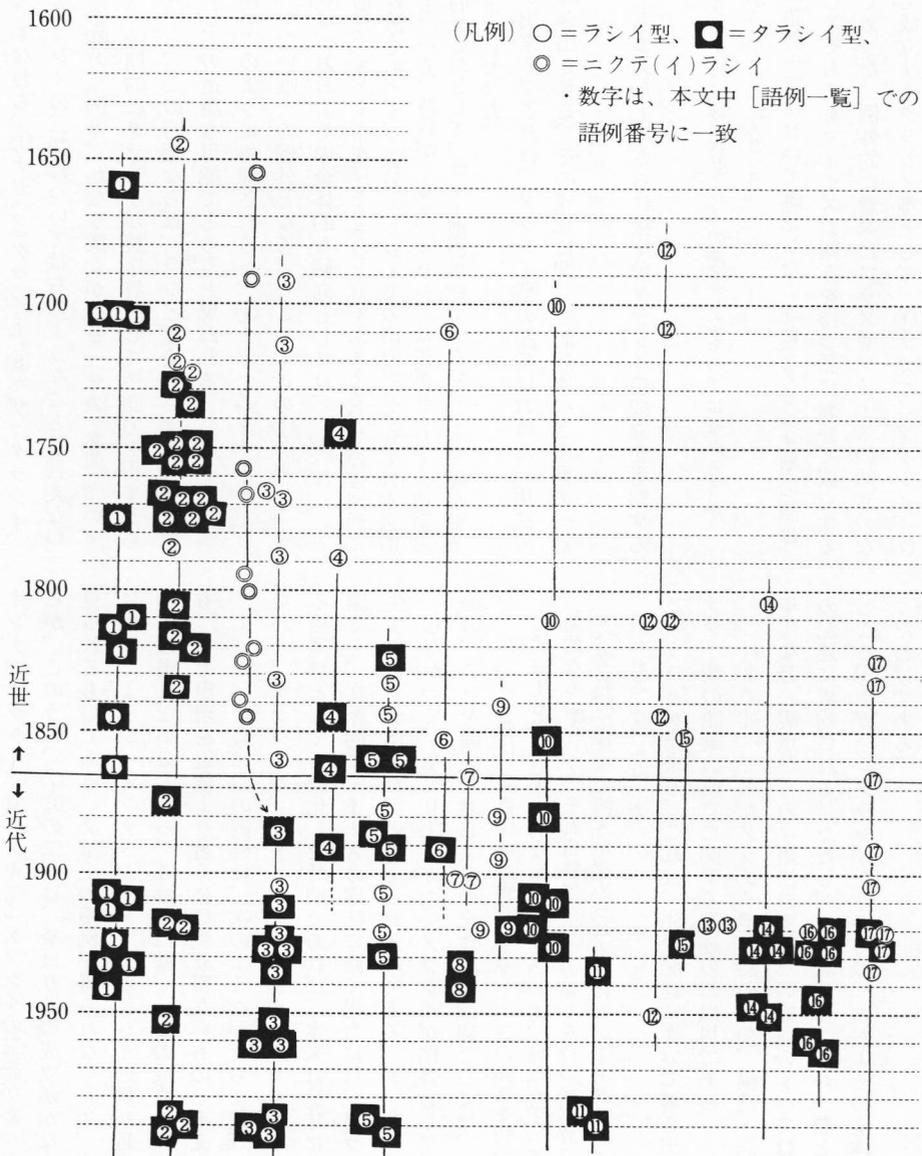
よってこれらのタラシイ型は、上接部にタラシイが直接して成り立つのではなく、先行するラシイ型を介して成立したものと考えられる。例えば、②ムゴタラシイは、ムゴイという形容詞の語幹ムゴにタラシイが付いて出来たというよりは、ムゴラシイという形容詞に対し新たな語形として生じたもの、B類の⑩ミレンタラシイも同様に、ミレンという語にタラシイが付いてではなく、ミレンラシイに対する新たな語形として生じたものであろう。

そして、先に確認したような両者の意味用法の違いから、タラシイ型は、ラシイ型に対する強調形として位置付けることが可能である、と考えられる。

ここで問題となるのは、対応するラシイ型を持たない例外的な先

[年表]

(ラシイ型・タラシイ型の用例の年代的分布)



の三語である。すなわち、①ナガ(ツ)タラシイ、⑧キザツタラシイ、⑩ミジメ(ツ)タラシイの三語については右のようなことは言えないが、このうち⑧⑩の二例は、かなり成立が下る〔年表〕参照。いずれも近代以降、時期的にタラシイが接尾辞として造語力を得てからの成立であるから、この時期ならば、ラシイ型を介さず上接部にタラシイが直接しての造語も可能であろうと思われる。

⑧⑩の二語がこのように処理されると、①ナガ(ツ)タラシイだけが、説明のつかない唯一の例外となる。ここで、この①ナガ(ツ)タラシイを除けば、おおよその全体的な傾向としては、

タラシイ型は、もともと先行するラシイ型をふまえて、その強調形として成立したのであって、これがタラシイ型の語の成立としては本来的なものである。一方、時代が下ると、タラシイは接尾辞としての造語力を得、応用的なものとして、ラシイ型の確認できないタラシイ型の語も造語されるようになった。

ということが出来る。これは、タラシイ型の語彙における「用法の実態」から導き出される、その成立に関して記述すべき事柄の一点目である。

この記述をふまえた上でさらに接尾辞タラシイの成立を考察するならば、

・接尾辞タラシイは、接尾辞ラシイの肥大したものではなからうかとの見通しが立つことにならう。

さて、先に語例一覧において確認したように、タラシイ型の語は、語の意味としてそもそもマイナスの傾きを持つ語において成立するものが大半であった。例外的に意味にプラスやマイナスの傾きのない語において成立するタラシイ型として、①ナガ(ツ)タラシイ、⑦

オンナツタラシイ、⑬ノンキ(ツ)タラシイの三語があったわけであるが、このうち、⑦⑬の二語は、やはりその成立がかなり遅れると見られるものである。文献上の用例が得られないため、成立の時期は推定によるが、オンナラシイ・ノンキラシイの例が近世末より早くには現れないこと^{注9}から、これらに基づいての成立と見られる⑦⑬も、その出現を近代より古くには溯り得ないものと考えられる。

よって、この二語の例外は、次のようなかたちで処理される。すなわち、タラシイが、好ましくない事態やようすを表す語を形成する接尾辞として一般化した時期であれば、本来は意味に傾きのない語でも、文脈的にマイナスの意味に傾く場合には、タラシイ型を派生することが出来た、と考えられるのである。

したがって、やはり①ナガ(ツ)タラシイが例外としてなお残るものの、これを除いたおおよその全体的な傾向としては、

タラシイ型は、語自体の意味としてマイナスの傾きを持つものにおいて成立するのが、本来的なものである。一方、時代が下ってからは、応用的なものとして、それ自体マイナスの傾きを持つ接尾辞タラシイにより、文脈的に意味の傾きが認められる語においてもタラシイ型の派生が行われるようになった。

ということが出来る。これは、先の記述に次いで導き出される、タラシイ型の語彙の成立に関する記述の二点目である。

これまで述べて来たタラシイ型の語の例の、構造・語形、意味、年代などの観点からの「用法の実態」の検討のすべては、右の二点の記述に集約される。ただし、この記述は、僅か一語とはいえない例外となる①ナガ(ツ)タラシイを除いての、おおよその全体的傾向であったわけである。

ところが、すべてのタラシイ型に先駆けて、最も早くに成立したのは、実はこのナガタラシイの語である（「年表」参照）。ナガタラシイの語は、対応するラシイ型を持たない点においても、また、ナガイの語が持つ意味が本来プラスにもマイナスにも傾くものではない、という点においても、右の二点の記述に外れる。しかも、それに矛盾するかたちで、用例の出現は最も早く、時代が下って現れたほかの例外のように解釈され得ない。

*ナガラシイという語が存在しなかつたことは、文献に例が見出せないということだけでなく、「ナガナガシイの語の存在」という理論的な側面からも考えられる。ナガイに対してはナガナガシイの語が、位相や文体によらずごく一般的に用いられており、*ナガラシイは、おそらくそもそも必要とされなかつたものと考えられるのである（「*」の記号は、その語が存在しないことを表す。以下同じ）。

また、ナガイというク活用形容詞が、単に物理的な量性をいう語であることは疑いがたい。語としての意味にマイナスの傾きはなく、文脈によつてはよい意味で用いられるものであることは、上代から今日に至るまで変わらない。もちろんナガイには好ましくない長さについていうような用法の偏りも認められない。

さらに、語の成立の順についても、ナガタラシイが最も早いことは、以下のように確認される（以下「年表」参照）。ナガタラシイの初出は、

（例9）比丘尼ども二人いで来て哥うたをうたふ。頭かしら哥うたは聞きもわけられず。たんぜんとかやいふ曲かま節ふしなりとてたゞあゝくとながたらしくひきづりたるばかり也（東海道名所記—二 万治二年—一六五九）

の例であるが、異同や成立年代などの面から検討してみても、これ

は存疑例とはいえない。さらに、この例以外にもナガタラシイの早い例が、元禄期の雑俳に二、三見出されるのである。^{注13}

一方、ナガタラシイに次いで成立するムゴタラシイの成立時期も、その初出例注14からそれほど溯るものではないと考えられる。ムゴタラシイはムゴラシイの肥大形と捉えられるが、そのムゴラシイの例が現れ始めるのは、ナガタラシイの出現の時期とほぼ同じ頃である。^{注15} 逆にいえば、ナガタラシイが見え始める頃、ムゴタラシイはまだ現れないどころか、その母体となるムゴラシイが漸く成立したという段階であった。その肥大形ムゴタラシイが生じるには、もう暫く時間を要するものと見られ、要するに、ムゴタラシイがナガタラシイより先に成立した可能性は、考え難い。

以上見たように、造語の在り方においてやはり例外であるナガタラシイが、やはりすべてに先駆けて成立していることは、否定できないのである。

では、これらの現象をどのように解釈し、最終的に接尾辞タラシイの成立をどう考えるのか、以下、さらに考察を進めていく。

まず、先の「おおよその全体的な傾向」としての二点の記述はさておき、それに外れるナガタラシイの語が最初に成立していることは、否定出来そうにない。そこで、

ナガタラシイの語は、ほかのものとは異なり、何らかの個別の事情・個別の経緯によつて、まず最初に成立した。そして、次いで成立したムゴタラシイ以下のタラシイ型の語は、すでにあるナガタラシイの語形を言わば借りるかたちで、ラシイ型の強調形として生じた。

と考へてみる。

ナガタラシイという単独の語の存在から、類推によつて新たな語

が生じるとするには、語例用例ともに量的な面での裏付けがおぼつかないなど、疑問も残る。が、近世期に非常な勢力を持ち、多用されていたラシイ型の語には、多用されることで摩滅した表現価値を補填する必要、つまり、より強烈な意味を表し得る新たな語形の必要があつたであろうと考えられる。このラシイ型の側にある肥大形の要求を満たすのに適したものとして、ナガイに対するナガタラシイの語形が受け入れられた、と考えることは可能であろうと思われる。

ナガイという語は、本来、語の意味としては何ら傾きをもたないものであるが、ナガタラシイという語形をとるとき、それは必ず、度を越した、好ましくない長さを表す。つまりナガイは、ナガタラシイという語形を取ること、文脈によらない語としての意味にマイナスの傾きを固定し、ここにまず意味にマイナスの傾きをもつタラシイ型の語形が生じる。

そして、以後そういう意味合いになう接尾辞として、タラシイは、特に意味にマイナスの傾きをもつ語において、それもラシイ型に対して、新たな語形としてタラシイ型を成立させるに至つた。

これが、考えられるタラシイ型の語彙の形成過程であり、また、最終的に描き出される接尾辞タラシイの成立過程ということになる。

これに従えば、例外的なナガタラシイの語がタラシイ型の本来のものであることになり、むしろ、先に「本来的なもの」としたタラシイ型は、実はすでに応用されたあり方であつたということになる。

三、タラシイの発生について

ところで、タラシイ型のそもそもの発祥であるナガタラシイの語の個別的な成立事情がどういふものであつたのか、という点を保留している限り、接尾辞タラシイの発生は依然不明なままであり、その「成立」も解明されたことにはならない。

また、さきの二点の記述には、解消されなければならない疑問がふたつ生じる。すなわち、一点目の記述から得られる、接尾辞タラシイを接尾辞ラシイの肥大とする見通しからは、

(一) それならば、ラシイが肥大するに当たつて、なぜ他ならぬタラシイという形がとられたのか？

という疑問が、また、二点目の記述からは、

(二) 接尾辞タラシイにおける(ひいてはタラシイ型の語形における) マイナスへの意味の傾きは、いったい何に由来するのか？

という疑問が生じる。

これらの疑問をとくカギは、タラシイのそもそもの発生である、ナガタラシイの語の成立事情にかかわると考えられる。これについて考えられるひとつの可能性を、以下に述べておきたい。

本稿では、意味用法の類似から、ナガタラシイの成立にかかわるものとして、タラタラという語を指摘する。中世の抄物から例の見られるこの語は、下二段動詞タル(垂)に由来し、本来は「雫などが続けざまにしたりおちるさま」を表すものであるが、近世以降は、「何かが長く続くさま、また、何かを長く続けざまにするさま」を表す(上方では「タラダラ」という形をとる)。

(例10) うしの日に思ひ初てやたら〜とありて長引く恋もする哉(狂歌

百首歌合一下(不逢恋) 寛文十一年(一六七二)

(例11) 筆に任せてかきちらす、一ツ金子五十兩請取申さず候、よつてもん日の為びん水入くだんのごとしと、あほうのたらく、かきちらし(冥途の飛脚 正徳元年(一七一二))

(例12) 目黒参りに、態と夜中に詣で、道すがら家毎の戸を扣き、大口のたらく。今ほどかへり見れば、我ながら人でなしといふ身持。(当世下手談義一三 宝曆二年(一七五二))

(例13) 不足たらしく、三男がもらふ江戸の店、くわぬ茄子をきる女房(雑俳・冠付化粧紙 文政九年(一八二六))

このような意味でのタラタラは、ナガイという語の持つ意味になり接近した内容を表すが、これがナガイと混淆することでナガタラシイの語が成立したという可能性は、考えられないだろうか。

もちろん、これはあくまでも、仮説としての提示にとどまるものである。十分な論証の及ぶものではなく、また、他にも幾つかの可能性が考えられる。しかし、傍証という程度の蓋然性は、それらの可能性のなかでは、最も指摘しやすい。つまり、今述べたような、ナガイとタラタラとの意味の接近以外に、次のような点が指摘出来るのである。

まず、ナガタラシイとタラタラとは、用法の特徴に幾つかの近似が認められる。タラタラの例は、ほとんどの場合、言表またはそれに準ずることがらの長さについて用いられているが、この用法の偏りは、ナガタラシイにも同じく認められるものである。

(例14) コレ女中。ながたらしいよまい事お觸のあつたおたづね者。かねにするのじやサアあゆめ(新内節・増補宮園集都大全一 恩愛草の茵 永頃(一七七二)一七(八))

(例15) 待ちなさんせ。長たらしい言伝しようよりは、ちやツと戻つて家

の用も、足したが宜い。(軒並娘八丈・初・上 文政七年(一八二四))

(例16) 此度ハよろしひ御ゑんぐみがムリまして：いく久しふおめでたふ存升：嫁子様でムリ升るか始めまして：トおなじ口上をながたらしくく：一生けんめいに：いふている(穴さがし心の内そと 元治前後(一八六四))

思案タラタラ(雑俳・一夜泊 寛保三年(一七四三))といった場合のタラタラや、長居をする客・仕事にかかる日数などについていうナガタラシイのように、言表(及びそれに準ずることがら)以外のものを用いられたものもある。

(例17) なかたらし/年玉を出す祭り客雑俳・俳諧辻談義 元禄十六年(一七〇三))

(例18) 長たらしい/紺屋任せにほつてみる(雑俳・太箸集一四 天保六年(一八三五))

ただしその場合でも、両者ともに、物質の空間的な長さについていうものはまれであつて、時間的な長さについて言う場合が圧倒的に多いのである。

また、どちらも歓迎されない長さについていう場合に限られるという、マイナスへの意味の傾きが、これらタラタラ及びナガタラシイの例からは、看取されるのである。

このような意味領域へかかる制約においてタラタラとナガタラシイとが酷似することは、先の仮説の蓋然性を多少なりとも保証するものとは考えられないだろうか。

次に、先の二つの疑問についてであるが、ナガタラシイに認められる、この語形を取ることで生じる右のような用法の特徴が、そもそもタラタラの語に由来するものであるとすれば、先の疑問の(2)は、解消されることになる。また、タラシイにおけるタが何なのか

という考察にしても、幾つかの仮説が立てられるものいづれも蓋然性が低く、疑問の(一)は解消され得ないが、^{注18}夕が何なのかではなく、タラシイが何なのかと考えて、その語形がタラタラに由来するとするならば、この疑問も解消されることになる。

このように、両方の疑問が解消出来るという論理的な整合性も、ナガタラシイの成立にタラタラがかかわっているのではないかとの仮説に対し、その蓋然性を示すものにならうか。^{注19}

以上、ひとつの可能性を示して見たが、ナガタラシイの語の成立事情については、なお検討の余地がある。例えば*ナガタラト*・ナガタラダラニなどといった中間的な形態が見られない以上、ナガイとタラタラとの混淆とする見方には、なおミツシングリクが残ろう。あるいはナガナガシイとタラタラとの混淆とした方が、共に重複形態ということ、より蓋然性が認められようか。用例の発掘をふくめ、今後の課題としたい。

四、ニクタラシイの成立について

成立に個別的な経緯を持つタラシイ型としては、もう一例、ニクタラシイの語がある。これについては、近世上方にニクテラシイの語が見られ、成立の経緯をニクタラシイ↑ニククラシイ↑ニクイ、といった単純な図式で説明することが出来ない。

ニクテラシイは、憎々しいさまをいう「憎体」^{注20}の語に、接尾辞タラシイの付いて出来たニクテイラシイの短呼形で、元来接尾辞タラシイとは無縁の成り立ちを持つ語である。

近代に入るとこの語は他のタラシイ型の出現と足並を揃える形でニクタラシイへと語形を変えるが、この変化は、接尾辞タラシイの

定着によつて促されたものと考えられる。

五、まとめ

以上、本稿で論じた接尾辞タラシイの成立を、ここにまとめておく。タラシイの成立は、その時期と経緯とにおいて、三段階にわけて考えられる。

まず、その発生は、近世初頭、十七世紀中頃にまで溯れる。すなわち、一六〇〇年代半ばにナガタラシイにおいて個別の経緯で発生した。

そして、近世期を通じて、マイナスの意味を持つ語において、ラシイ型の強調形として応用され、A類からB類へと用法を広げ、一般化した(「くタラシイ」という語形の応用はまずムゴタラシイにおいて行われたが、この語は用例も多く得られ、かなりよく用いられたものと見られる。ナガタラシイ・ムゴタラシイの二語が揃い、盛んに用いられれば、そこからの類推で以下のタラシイ型が生じるのは、^{注22}あながち無理な話ではないと考えられる)。

近世末から近代初頭にかけてタラシイは漸く接尾辞としての定着を見、その最も旺盛な生産性はむしろ、遅く近代以降、十九世紀後半以降に発揮されたものと考えられる。近代以降の生産性の表れは、B類造語の語数の多さや、例外的な造語、ニクテラシイの語形変化など、^{注23}以上見て来た幾つかの観点から窺えよう。

接尾辞タラシイは、その発生から定着まで、およそ二百年近くの長い時間をかけて成立した、と言える。ただし、近世初頭のナガタラシイの語の個別的な成立、およびムゴタラシイの語における語形の応用の段階は、あくまでタラシイ型の語形の発生であつて、厳密

には、接尾辞としての造語力を持った近世末から近代初頭にかけての時期に、接尾辞タラシイの狭義の「成立」をみることになる。

注1

前者について、アマタラシイは、アマ(ツ)タルイのシク活用化(より情動的な意味を表す)と順行同化による語形であろうと考えられ、ナガタラシイなどのタラシイ型よりは、むしろ、方言に見られるタラシイタルイと対応などと共に捉えられるものであろう。また後者について、接尾辞タラシイの一般化に遅れるニクテイラシイ→ニクタラシイの個別的变化(本稿四節参照)をもって、タラシイの成立は説明できない。なお、吉田(一九七二)において、ラシイ型の形容詞への言及に際し「『たらしい』の形も出て来ている」とある(三二〇頁)のは、タラシイをラシイからの派生とするものであろう。

注2

語例の採集にあたっては、現に用いられるタラシイ型の語例をできるだけ多く得るべく、文献調査に加えて、どのようなタラシイ型を用いるかについてのごく簡単なアンケート調査を個人的に行った。用法の実態を把握するため、「語例一覧」には、両調査により得られた語例をなるべく網羅的に取り上げた。よって、例えば、文献に例が見られても孤例であり今日一般に聞かず、作者の造語かと考えられるもの(⑨(里見弴「今年竹」大正八年(一九一九)、⑩(久保田万太郎「春泥」昭和一年(一九二六)や、文献に例が確認できず、使用者の地域も限定されるなど一般的でないもの(⑦、⑬)なども、ここには含まれている。なお、文献調査及びアンケート調査の範囲・対象等については、「付記」参照。

注3

ノンキの語は、#を付さない語のように決してプラスの意味で用いられることがない、というわけではないものの、実際には、近代以降マイナスの意味合いで用いられることが多いようである。また、ノンキラシイの語においても、タラシイ型を生じやすい、意味的な契機を認めることができる。

注4

(例19) みんな甲斐々々しく出立つてゐるのに、暢気らしくステツキなどついて、まだぬくもりのある焼灰の上を、洋袴の裾や靴をいたはるやうな足どりで歩いて行く自分自身が、ひどく不調和に、後めたくさへ感じられた。(今年竹「里見弴」焼土・四 大正八年(一九一九))

接尾辞タラシイは、さまざまなものに接尾してラシイ型の語を生産する。例えば、イトシラシイ・コワシイなど接尾辞タラシイが形容詞語幹に付くもの、アワレシイ・マジメラシイなど形容詞語幹に付くもの、ウウキラシイ・サイイシイなど体言に付くもの(湯沢(一九三六)(一九五四)参照)。なお、今日でも一般に用いられるカワイラシイ・イヤラシイ・モットモラシイなどの語も含め、これらの語におけるラシイは推定判断を表す口語助動詞としてのものではない。

注5

例えば、⑤の場合、イヤミラシイの語では、多くの場合、(例20) 二日置三日置に、お蝶の肩へつかまつて、湯までそろ／＼行ますけれど、引用者注：病氣のためにまことにい／＼みらしい程力がなくつて、やう／＼歩行ますヨ(春色梅児普美一・三・一七 天保二三年(一八三二)～三)

のように、言表事態に対する単なる発話主体の「嫌だ」という感じを言い表すのに対し、イヤミ(ツ)タラシイの語では、もつと動作主が積極的嫌がらせや皮肉を意図した場合に、その言動についていう場合がほとんどである(和英語林集成 第三版(明治十九年)には、Ironicalの訳語が見える)。⑩においても、スケベエラシイの語は単に「色香のある」という程度の意味でも用いられ(例7)、女性の形容に用いられるが、スケベエ(ツ)タラシイの語になると、嫌悪感を伴うような好色ぶりを描出する文脈で用いられ、対象も男性にほぼ限られてくるといった違いが見られる。

注6

④スカンタラシイ⑤イヤミタラシイの二例は、タラシイ型の初出例より早いラシイ型の例が未だ得られない。⑤の場合、両型の初出

例は接近して見られ、必ずしもタラシイ型がラシイ型より早く成立したとは考えられない。一方④については、タラシイ型の例がラシイ型よりかなり早くに見られ(スカンタラシイの初出例は(例2)、成立の前後関係に多少問題がある。

ただし、(例2)では、このすぐ後に、禿のこの台詞に対して「ハテ其方達は奇麗に育つた子供じやが、物云が唐めいて、すかんだりんせで訳が知れぬ」との言葉があり、これから考えて、少なくともこの時期、スカンタラシイの語はまだ一般的ではなかった(この例は臨時的な造語であつたか)とも見られる。

注7 形成された語の結果的な構造は「上接部+タラシイ」だが、語が出来た際の形成過程は「ラシイ↓(肥大)↓タラシイ」であろう。なお、阪倉(一九六六)においては、前者は「語構造」、後者は「語形成」として区別されてある。

注8 ただし⑩の成立に関しては、ミジメッタの語の影響も、あるいは考えられようか(注18)において後述。

注9 オンナラシイの初出は、和英語林集成初版(慶應三年(一八六七))、ノンキラシイの初出は里見淳「今年竹」(例19)他であろうか。

注10 先に、ラシイ型と重複形容詞とを表現性の上で等価なものと考えておいたが、これは、形式としての表現性を等価なものとして捉えることが出来るというのであつて、語レベルで両形態が必ず対応するというのではない(例えば、ムゴラシイ・ムゴムゴシイ、*オモラシイ・オモオモシイ)。実際に語として両形態が対応するものは一般的なものとしてはニクラシイ・ニクニクシイ、バカラシイ・バカバカシイぐらいであり、両形態はむしろ相補的に存在する(ただし、中世抄物にはハカバカシイ・ハカラシイ、ゲウゲウシイ・ゲウラシイなどといった対応が見られ(村上(一九八一)、この期には対応するものがなお幾つかあつたようである)。

注11 わが命も(那我俱)もがと言ひたくみはや(雄略紀・歌謡)。現代でも、「長い付き合ひ」「(人気が活躍に関して)息が長い」などと

いう場合のナガイは、喜ばしいことである。

注12 版本は諸本同版(都立中央図書館加賀文庫蔵本、青果真山杉旧蔵本、東京安田文庫蔵本、国会図書館蔵本等)、写本は版本の写しで、異同なし。また、成立年代についても、異説は数年の幅のことであり、ここでは問題とならない(北条(一九七二)、市古(一九七九)参照)。

注13 後出(例21)。また、「あかゑぼし」(元禄十五年)及びその改題改竄本「俳諧なげ頭巾」(元禄十六年)には、ともに、笠付の題に「長たらし」の語が見える。

注14 むごたらしう見へる質屋の土用干(享保十四年(一七二九)刊「玉みかき」)

注15 新增犬筑波集—油糟(寛永十九年(一六四二))が初出か。

注16 例えば、ムゴイ—ムゴラシイ—ムゴタラシイの対応において、後者ほど形態の成立は新しく、また、後者ほどムゴさの度合いは大きい(乃至は、あるものごとがムゴいということ述べるに当たつての情意が強い)。

注17 ごく稀に、ナガタラシイがコトの長さではなく、モノの長さについて用いられた例が見られる(雑俳においてナガタラシイが笠題として用いられる場合に限られる)。

(例21) なかたらし／我面くわす味噌拵木(雑俳・俳諧辻談義 元禄十六年(一七〇三))

(例22) 長たらしい／ミヤげ一本引かたげ／卯月八日に鎗が立雑俳・冠付玉の光 天保十五年(一八四四))

注18 例えば、仮説の一として、オモイ—オモタイ、ネムイ—ネムタイ、ケムイ—ケムタイの対応(このような対応を見せる例はこの三組のみ)におけるタを、強調のニュアンスを担うタとして、ラシイ—タラシイの対応におけるタと共に捉える可能性が考えられよう。しかし実は、後二組は「イ」の語形の方が後に成立したものであり、形容詞がタを挿入することで強調されたものとは捉えられない。また、

助動詞タに接尾辞ラシイの付いた「すいたらしい」「恩に着せたらしい」などの表現からの類推といった可能性も考えられるが、近世を通じて、接尾辞ラシイの用法は(注4)に述べたもの以外には非常にまれであり湯沢(一九五四)他、こういった表現は、タラシイ型の語彙に遅れて近世末によく一般的に現れるのであって、年代的な観点から、これを関係付けることはできない。

なお、⑩(ミジメツ)タラシイ⑪(ブショウツタラシイ)に対して、方言ではあるがミジメツタイ、ブショウツタイの語形が存在し(日野資純氏の御教示による)、こういったいくつかのタラシイ型の語の成立に関しては、あるいは個別に、「ツタイ」の語形からの影響も併せて考えなければならぬかと思われる(小学館『日本文学大辞典』によれば、ブショ(一)ツタイは、訛形ビショ(一)ツタイも含めて東日本のみに見られるようである)。

注19
なお、のちに成立したタラシイ型のいくつかについても、タララとの間に何らかの関連が認められる、という点が指摘出来る。例えば、⑤(イヤミ)ツタラシイ⑥(ウラミ)タラシイ⑦(ジマン)タラシイについては、それぞれ「またいやみのたらん、いふて」「色深狭睡夢」下(文政九年(一八二六))「兄貴が怨みたらん、云つたが」「真景累ヶ淵(三遊亭円朝)三十七(安政六年(一八五九))」「じまんならん、の所へ」(露体置土屋一三(宝永四年(一七〇七))のような例が確認され、また、⑰(ミレン)タラシイに関しても、ミレンタラタラという表現が現代口語において行われている。これらの表現はまた、嫌味をタレル、自慢をタレルなどの表現とも共に捉えられ、タルータラタラータラシイの関連は、比較の後まで持ち越されるものと見られる。

注20
形容動詞語幹として憎体ナ、憎体ニ、などと用いられるが、他に「憎体口」「憎体面」といった語を生むなど、近世上方においては、文献のジャンルを問わず非常によく用いられる語である。この語の構成や用法については、同類と見られる「常体」「実体」などの語と

共に、稿を改めて論じたい。

注21
その時期は、文献の記事などから、おおよそ近世末期から近代初頭と見られる。ニクタラシイの初出例は、和英語林集成第三版まで下るが、これ以前にニクタラシイが成立し、東一西でニクタラシイ(ニクテラシイ)の両形が併存していた可能性も考えられなくはない。しかし、文政四年(一八二二)の『浪花聞書』(『浪花方言』)において、「にくてらしい」の語が「にくたらしい也」ではなく、「にくらしい也」と説明されていることから見て、この時期に江戸においてまだニクタラシイの語が一般的でなかったことが考えられる。

注22
B類の幾つかのものについては、なお注19に触れたような自慢タラタラなどの表現の影響も考えられてよいであろう。

注23
地域によっては、ハガ(一)ツタラシイ、バカツタラシイ、文句タラシイ、不満タラシイ(以上アンケートによる、記入五名未満につき「二覧」にあげず)、甘ゲツタラシイ(胤森弘氏の御教示による)など、あまり一般的でないタラシイ型の例も見られるようである。また、アンケートでは、使用すると回答が一名のみのキタナツタラシイ、シツコタラシイ、アホツタラシイなど、臨時的個人的な造語かと思われるものや、使用語彙ではないがこんな語はありそうだ、という語例(理解語彙というよりは、言わば許容語彙ともいうものか)の記入もあり、接尾辞タラシイの生産性は今日なお保たれているものと見られる。

【参考文献】

市古 夏生(一九七九)『近世文学資料類従 古版地誌編7 東海道名所

記 解題 勉誠社

阪倉 篤義(一九六六)『語構成の研究』角川書店

峰矢 真郷(一九七四)『語の文法的構成—疊語について—』『萬葉』86

(一九七六)『形状言の重複の一形態』『親和国文』10

(一九七八)『一部重複と縮重複』

(一九八一)「重複形容詞の構成」『同志社国文学』19

北条 秀雄 (一九七二)「改訂増補 浅井了意」笠間書院

村上 昭子 (一九八二)「接尾辞ラシイの成立」『国語学』124

湯沢幸吉郎 (一九三六)『徳川時代言語の研究』上方編——刀江書院

(一九五四)『江戸言葉の研究』明治書院

吉田 金彦 (一九七二)『現代語助動詞の史的研究』明治書院

〔付記〕

文献調査の範囲は、以下のとおり(用例の引用もこれによる)。

仮名草子集成1~14(既刊分)、洒落本大成(全)、岩波新大系81(該

義本類)、叢書江戸文庫13伏斎樗山集、近世文学総索引(近松・西鶴)、

日本名著全集15人情本集、いろは文庫・八笑人・和合人・七偏人(以

上有朋堂文庫)、浮世風呂(岩波大系)、雑俳集成第一期②④⑩第二期

①②⑤⑨、柳多留一~十編(社会思想社現代教養文庫)、岩波日本思

想大系42石門心学、同59近世町人思想、同60近世色道論、近世笑話集

上・中・下(岩波文庫)、徳川芸文類聚7~10(脚本・俗曲)、穴さが

し心の内そと(近代語研究4)、春雨文庫(江戸文永堂)、明治文学全

集10円朝集、二人女房(岩波紅葉全集)、今年竹(春陽堂)、筑摩書房

現代日本文学全集29、昭和文学全集3・4、暗夜行路(岩波直哉全集)、

己(中央公論社谷崎全集)、90年鑑代表シナリオ集(映人社)。

なお、雑俳の一部は未完雑俳資料によった。また、現行の辞書類の

挙例や個人的に報告を受けたものについても、本文を確認し文献調査

により得られた用例に加えたが、その場合、引用は次のものによった

(本稿中の挙例のみ示す)。(例2) 統帝国文庫並木宗輔浄瑠璃集、(例

3) 河出書房定本横光全集、(例4) 小学館実篤全集、(例7) 朝日新

聞社近松全集、(例10) 日本名著全集狂文狂歌集。

また、併せて行ったアンケート調査は、タラシイ型の語例を網羅す

である。調査に際しては、個人的な知人に加え奈良女子大学の教官・学生に協力いただいたことで広い地域(主に関東・東海・中部・北陸・近畿・中国・四国、計七〇名)において回答者が得られ、さらに知人友人の協力を得て札幌市及び福岡市を拠点に、北海道・東北(計約五〇名)、九州(約四〇名)の回答者を補うことができた。(合計約一六〇名、七歳~七七歳、男女。特に地域的な面で十分な調査が行えたことと、文献には見出せない幾つかの語例も得られ、調査の目的は達せられたものと考えられる。なお、実施は平成六年八月下旬~十月下旬、札幌市及び福岡市での調査は、大任清典(北海道新聞社編集局)・大任裕子(北海道大学学生)、及び波多野真理子(九州大学大学院)の各氏の協力を得て実現した。

なお本稿は、国語学会平成六年度秋季大会(於・山口大学)での口頭発表をもとにまとめたものである。席上、日野資純氏、井手至氏、新野直哉氏より有益な御教示を賜った。記して深謝の意を表す。また、注において記し得た以外にも、発表の前後を通じて、語例や用例の報告を含め有益な御教示を戴いた非常に多くの方々に、併せてお礼を申し上げます。

——奈良女子大学大学院生——

(平成六年十一月三十日 受理)

(平成七年一月十日 改稿受理)